同窓会長のリーダーシップ

松見得明石桜同窓会長は昭和三四年次末以来在任三五年に亘った。

母校第一回卒業生という自負と責務から人後におちない母校愛に燃え、母校の発展、向上を希って常に若々しい情熱をもって、同窓会活動をリードしてきた。

昭和五二年の校舎炎上焼失に際しての募金協力、創立五〇周年記念事業、六〇周年記念事業等、同窓会の歩みの節目々々で「石桜同窓会報」紙上で次のように訴えた。

石桜同窓会報復刊によせて

母校！　それは良きにつけ悪しきにつけ青春の情熱を燃やし、自己表現に向けて精進した道場である。

同窓！　それは人知の及ばぬ不可思議な縁に結ばれて石桜の象徴のもと、同じ窓辺によりあい、知能を磨き、豊かな情操を培った同志である。従って母校同窓なるものは具体的な生活感情の中に存在するものであって、抽象的観念的なものではない。それなればこそ同志ときけば、ただそれだけで親近を覚え、心通ずるものを直感するのである。母校・同窓とはまことに不可解な魅力をもつものだと思う。

さて、母校創立以来すでに六十有二年。この間各界各層に亘って必須にして欠くべからざる有為の人材輩出は枚挙にいとまなく、石桜精神の発揚いよいよ盛んなるものがある。在校生また先輩の後を継ぐべく鋭意研鑽にいそしんでおり、その前途期すべきもののあることは喜びにたえないところである。

この時に当たり学校法人岩手奨学会においては、かかる校運の進捗に対応し、さらにその伸展をはかるべく、かねて先代三田義清理事長の宿願であった体育館の新設を始め、プールの移転建造、生徒増に伴う普通教室六教室の増築、さらには語学教育強化の一方策としてＬＬ教室の設置など総額五億七千万円にの

ぼる大事業に着工され、一二月には全施設の竣工と設備の完成が予定され、ここに岩手中・高等学校の一大飛躍が展開されようとしている。在校職員生徒はもとより私達同窓生にとっても共々に欣快且つ感謝にたえないところである。

しかしながら与えられる喜びよりも共に力を合わせて創造する喜びはさらに大きく、母校、同窓の紐帯を一層強固なものにすること必然である。換言すれば母校と同窓との紐帯のないところに母校という実感はあり得ず、母校というものの実感をもち得ずして同窓の欣快はあり得ないということなのである。誇りある母校たり得るか否かは実にこの共感、紐帯の意識の如何にかかわっているのではなかろうか。

こうした意味から過般応分のご協力をお願いしたのであるが、現在漸くその半ばに達してやや停滞の状況にあり、今後の協賛に待つところ多大である。事情ご賢察いただき、早急にご支援下さいますようお願いするところである。

なお、同窓会もこの機に応じて、〝石桜同窓会報〟の復刊を企画し、母校、同窓間の交流を密にすると共に、各位の提言の窓口ともいたしたい。（後略）

創立六〇周年記念事業としての校舎増築、体育館、プール建設をめざした同窓会募金活動は六二年五月にスタート。同窓生有志、法人、故三田義一理事長、三田商店、卒業外教職員の芳志も相ついで工事費総計五億二千五百万円に対して募金総額四千九百六十五万三千六百二〇円となって募金事務が終了した。

募金終了の報告は石桜同窓会報第一四号（昭和六三年一二月一日号）の一面トップで掲載され松見同窓会長は次のように述べている。

母校愛健在

（前略）過般創立六〇周年記念事業として、学校施設設備の拡充が営まれたが、その後お願いしましたご協力の件、目標額三〇〇〇万円を達成することができました。まことにありがたく心から御礼申し上げます。

このことは各位の母校愛健在を示すものでありご同慶に堪えないところでございます。

落成式の際は生徒諸子の一人一人の喜びを目の当たりにし、眼の輝きに今後が期待される思いでした。（後略）

平成六年度石桜同窓会総会は六年一〇月二一日盛岡市のホテルメトロポリタンで開催され、同窓会規約の改正と共に、役員の改選が審議され、松見同窓会長が退任、赤坂俊夫新会長が就任した。

石桜同窓会報第20号（平成六年一二月一一号）で松見前会長は在任中のいくつかの仕事の成功は会員各位の母校愛の成果であると感謝の退任の辞を左のように述べている。